

興信編目次

(索引)

伊原水藻平	三三三	長谷川 正	三〇九	友田久米治	三三六
伊藤好真	三〇七	畑 治三郎	一四三	▼ち之部	
伊丹友夫	五八	原 澄治	一九八	西原龜三郎	二一〇
井汲泰二	二〇六	原 玉之助	三四七	西原金藏	二一六
井尻艶太	二二二	原田留吉	二九六	西尾純平	三四四
猪脇要介	一三一	花房祐四郎	三三六	西山徳夫	一八六
岩智道賢吉	五〇	花房純雄	九二	西江嘉一	二七五
岩藤政太	一三〇	服部純雄	一二七	▼ほ之部	
家本爲一	三一〇	春名武雄	一八九	星島卓爾	二五
板谷重吉	一九四	春名順次郎	二二六	本城貞次郎	二二三
板谷新吉	一五四	万代一郎	二八七	▼へ之部	
石井徹顯	八四	万代常閑	三二六	別府方太郎	一〇三
石川保平	二四四	▼に之部	五六	▼さ之部	
石津龍輔	三〇六	仁科哲三	二〇	戸川專治	一五五
▼は之部		新谷 淑	二〇一	土居通憲	三一五
				豊福盛平	二四〇
				西原龜一	三〇五
				西原金藏	二一〇
				西尾純平	二一六
				西山徳夫	三四四
				西江嘉一	一八六
				▼ほ之部	
				星島卓爾	二五
				本城貞次郎	二二三
				▼へ之部	
				別府方太郎	一〇三
				▼さ之部	
				戸川專治	一五五
				土居通憲	三一五
				豊福盛平	二四〇
				友田久米治	三三六
				▼ち之部	
				千原正男	二一八
				▼り之部	
				龍門近次郎	二六五
				▼ぬ之部	
				額田治郎	一八七
				▼を、お之部	
				尾原音人	四五
				尾崎邦藏	一〇
				尾谷半三郎	三三二
				尾崎治太郎	七三
				小幡治太郎	一三四
				小川芳太郎	二四
				小川雄次	三一
				小川郷太郎	二〇五
				小田純糸株式会社	

い、ゐ、の、は、ほ、へ、ち、り、ぬ、を、お、の、部

か(お)わ、か、た之部

小田商店	二三〇	大久保曾野	一九四	波邊辨藏	七五	神原源平	三三三
小野哲二	五九	大藤昇	一四二	波邊忠男	二四六	神田仲藏	三三七
小野三郎	三四三	大森喜一	三四	波邊詰雄	二二二	▼よ之部	
小野虎吉	一一九	大守卓爾	二七七	渡邊卓示	二八〇	米田鶴平	三一九
小龜清三郎	一八〇	大杉善次郎	一四五	▼か之部		横山吳太	二八二
小倉一郎	一七一	太田有一	一四四	華山海應	九	吉川渡	一七四
小合金光	六八	岡田亮一	一〇八	上代淑	八	吉田菊次郎	一七九
小郷虎一	二六四	岡田忠彦	二七六	香山晴雄	一九一	吉野平四郎	三〇
小坂田藩平	二二〇	岡田忠彦	三三七	河野一平	一一〇	吉行澤太郎	八一
大原孫三郎	一九五	岡田注連太郎	二九四	河村正忠	三四五	▼た之部	
大原利武	二〇六	岡山ボンブ合資會社	二二六	河本亮	一一四	田中貞夫	一七〇
大林孫治	二〇八	岡崎超七	一八四	川野五平	三二	田中庄次郎	二九七
大橋平右衛門	三三九	岡本欽三郎	二二九	笠原房夫	一一二	田中廣司	二九一
大橋信吉	一三九	奥西豊治	二八六	柏野敬次郎	二七八	田中稔	三四七
大賀古壽	一七一	荻野廣太	二三五	柏木真一	三二四	田中馬鬼二	二九三
大塚良平	一七六	長船卯之助	五一	梶谷福一	三七	田中五郎	二二八
大野豊四	四	▼わ之部		梶谷福一	三五	田口福松	一三二
大野清五郎	三一四	和田誠之	二五九	神宮六三郎	七〇	田坂孝一	四四

た、つ、な、む、う、の、く、之部

多賀禮一	二七	立石岐	二二四	中村純一郎	二五〇	野村交正	一八二
多胡謙	二六三	建石雄一	二四八	中島榮	一五	野崎武吉郎	一
多胡又次郎	二八九	▼つ之部		中島善次	五四	野崎又太郎	七
多胡武一	二二七	津田明導	二七一	永江篤	一四八	野島瑛	三〇五
大供太郎	一一〇	津田明巖	二〇六	長船卯之助	五一	能仁事一	一四一
谷高三郎	二五八	都志太郎	三三四	難波剛一	二六〇	延原量一	一四三
垂井正平	一一二	坪井喜寛	九八	難波喜作	一五五	▼く之部	
高橋三代次	一六二	筒井繼男	二二一	▼う之部		久山又三郎	二二一
高橋特	二九二	綱島長次郎	二八四	宇垣宇三郎	三五三	國富友次郎	九九
高原証吉	一五七	常の花寛市	三五五	右手嘉三郎	二九六	窪谷逸次郎	二八六
高原星郎	一一一	▼な之部		内田金一郎	一五九	黒田高康	二四五
高原英夫	三五	名和剛	三二三	内田龍平	九七	黒田垣次郎	五〇
高草美代藏	三四二	奈良眞三郎	一一六	内田証一郎	二五六	黒瀬義一	一五九
高見草夫	二九九	内藤七郎	三〇三	浦上時次郎	一六八	黒住豊四郎	一三三
玉野知義	一〇四	中谷一也	五二	畝木卓之	一三七	倉山楠一	三一九
竹原彦九郎	四八	中塚均雄	二八五	上垣義郎	七二	倉片深	一一五
竹内重太郎	三二二	中村壽夫	一五三	上田元太郎	三四八	日下安太郎	三三一
武本幸之助	二二五	中村孝利	二八一	▼の之部		草野辰二郎	一二四

山ノ部	町田 祥	一六六	福岡 末造	一三八	古屋野橋衛	一六六
山上岩二	松岡 義光	四三	伏屋 忠繁	四〇	見島足袋合資會社	三〇一
山田直平	松江 恒次	一三二	藤原 悠太郎	一六二	見島織物株式會社	一二五
山田富三郎	前川 恒	二一三	藤原 佐々重	二四	見島礦泉飲料合資會社	三〇四
山前 環	前田 牛十郎	三四〇	藤江 久四郎	二六	頃末多三郎	一九二
山田 倫	正木 義仁	二二九	藤田 明借	一三	上代 淑	八
山田 準	牧 孝太郎	四一	▼ニ之部	三五二	甲田 鶴太郎	二八八
山田 寬一	万代 一耶	九三	小橋 果太	一八一	甲田 憲造	一七四
山野邊寛市	万代 常閉	三二六	小橋 政香	一九	香山 晴雄	一九一
山口惣兵衛	▼ハ之部	五六	小林 泰嘉	一八九	金光 保命酒	一一八
山口百治	古田 賀治	一〇一	小林 長九郎	三六三	金光 中學	六〇
山住克巳	古田 立次	二三一	小島 清潔	二七三	金光 攝胤	三二九
安田重朝	古林 隆良	一七六	小山 美登四	一七三	近藤 信夫	一八二
安倉 彌吉	福原 眞藏	一三四	小松 原卓一	一五三	近藤 萬太郎	三〇八
家本 爲一	福原 留五郎	二四七	古林 隆民	一六九	近藤 照一	二二〇
丸山 教正	福原 清太郎	一〇九	古賀 紋三郎	一七六	▼五、ハ之部	一一二
					惠藤 隆太郎	七一

江村 正路	赤木 金三郎	三六一	佐藤 克太	一七八	岸本 芳秀	一二三
櫻 昌	淺沼 登真大	三三五	佐藤 正勝	六二	岸本 康通	六六
遠藤 義郎	淺羽 春之	一五六	佐藤 庄次郎	一六〇	岸木 廉太郎	八八
遠藤 哲郎	朝倉 春三	一一八	佐武 憲一	二一	▼イ之部	
遠藤 俊一	秋本 茂二	八二	佐々木 志賀二	五	楠木 梶雄	一四五
▼テ之部	足利 義見	二〇四	齊藤 吉平	二〇九	▼ウ之部	
寺松 國太郎	芦田 登一耶	二二七	齊藤 諸平	一九五	▼オ之部	
天峯 雪嶺	安東 龜右衛門	三三	澤 三郎	二八四	三谷 時太郎	四七
▼ア之部	安東 眞夫	一八八	坂田 久五郎	四三	三浦 敏雄	一六七
阿部 三郎	安東 來治	一一三	坂田 義一	一〇五	三宅 寛平	六三
有元 郷治郎	安東 敏	二二六	榮谷 藤十郎	一六五	三木 染次郎	一五四
有元 吳洲	安東 守之	二六一	柳山 津宇	一六一	滿谷 英三郎	五七
有森 新吉	▼カ之部		藤山 常太郎	一六	光田 萬次郎	一四六
香山 新七郎	佐治 豊	一四七	▼キ之部		水畑 松清	一四六
荒川 義一	佐藤 虎太郎	四九	水村 彦	三六一	水河 序平	三六〇
天峯 雪嶺	佐藤 富三郎	一〇〇	水村 兼	一八九	水田 富太郎	一一
赤鹿 海軍吉	佐藤 植太郎	六四	喜多村 松齊	二八	水野 浩四	三六〇
赤澤 寛一	佐藤 代吉	六九			瀧手 保太郎	三
					右手 嘉三郎	二九六

し、ひも、せ、す之部

清水烈太郎	一八五	久岡金秀	三九	須田秋三郎	二四一
白坂正吉	二八三	姫井又次郎	一四	須々木正夫	七四
竺原宇一	一五〇	菱川吉衛	二〇〇	杉梅之治	二二三
島田金次郎	一三五	土方健彦	一六四	杉山岩三郎	三四一
突甘愛吉	二二	▼し之部		住田 陽	九〇
下山元太郎	二七四	森金重郎	三八	角野要平	三〇二
新免清真	一九〇	森元市	一二七	鈴木鏗爾	九五
新免行太郎	八六	森田順志	二二三	鈴木惠三郎	一九三
神宮六三郎	七〇	森安治一	三一七	鈴木昌平	一七九
▼ひ之部		森本邦次郎	八五		
日幡繼一	三一六	森末繁雄	一五一		
廣瀬耕一	三三一	守屋松之助	三〇〇		
人見 楠右衛門	一三九	守安愛一郎	二六七		
平田 敬	二〇二	▼せ之部			
平野武一郎	六五	瀬崎春治	一七二		
平松 直	二九	▼す之部			
平松長之助	三一	陶山鎮治	一一七		

野崎武吉郎氏

兒島郡味野町

前貴族院議員
製 鹽 業



野崎武吉郎氏

氏は嘉永元年八月三日の生誕、幼名を富太郎後襲名して武左衛門と稱し其後現名武吉郎と改名す、祖父は武左衛門、父は常太郎、君は其の次男なり兄市太郎氏は天逝し父祖ともに歸幽漸く十七才にして陶朱翁

頼の富を繼承す、明治四年岡山縣會計保出仕を命ぜられ、全五年第三十八區學問所副總括兼會計元請となる、全六年岡山縣廳出仕勸業掛員を命ぜられ後辭して家業を覽る、家は中國に於ける鹽田王廣袤百萬坪を超へ經營施設斯業の範たり、明治十六年水産博覽會に製鹽圖式を出品して賞状を受く文に曰く兒島灣數十里に跨る鹽田は祖父武左衛門の草創に係ると雖も、今日の盛大を致すは承後亦與りて力あり、祖孫相依り實に事業の終始を全うす云々、

と以て斯界の雄たるを察知すべし、明治二十三年帝國議會の開設せらるゝや貴族院議員に選出され國事に盡瘁淺からず明治六年岡山市街便利硝子燈費として金參千圓、全十三年縣下洪水救濟費として金千圓、全十八年兒島郡役所建築費として千圓、全十九年暴風